(2) 円滑な物流に大きく貢献－５万トンサイロ－

北海道の麦関連業界では、よく「５万トンサイロ」という言葉を用いることがあります。

もちろん、「５万トンサイロ」とは、通称であり、正式な名称は、平成元年８月に建設・稼働となった「農協サイロ株式会社　十勝港事業所」のことを指します。

農協サイロ株式会社は、昭和63年７月に、ホクレンと十勝管内小麦生産農協が出資した、系統農協100%出資の協同会社として設立されました。

私が、初めてこの構想に触れたのは、昭和61年の夏のことでした。このころ、私はホクレン本所　米麦課（平成２年２月より麦類課）の担当であり、帯広支所に出張の際に、当時、帯広支所　米麦農産課の主査であった森江氏（現　パールライス部長）から、森江氏直筆の「目論見」を見せられました。当時、小麦の面積は、毎年、増加の一途をたどり、これに伴い産地の収容力整備が追いつかず、「サイロのW回転（だぶるかいてん）」と称した早期出庫対策を行いながら、何とか収容力不足を凌いでいた状況にあります。

このような生産背景のなか、昭和61年の正月に、前出の森江氏と当時私の上司であった本所　麦類課の安達補佐（現旭川支所　次長）が、オーストラリアに研修（確かプライベートでいったと記憶しています）に行き、100万トン規模の港湾サイロを見学し、日本・北海道における流通施設整備の遅れに気づくとともに、集約的な港湾サイロによる建設コスト軽減メリットも勘案し、この「目論見」ができたと記憶しております。

小麦の産地貯蔵サイロといえば、農協の乾燥・調製施設に隣接したサイロが一般的であります。また、この「目論見」を見たとき、仕事における「夢」を感じる一方で、この巨大な施設が本当にできるのか、大きな不安を感じました。

しかし、森江氏のパワーは、当時から物凄いものがあり、十勝管内農協・帯広支所・本所　米麦事業本部を巻き込んで、「目論見」の実現に向けて、突き進み、平成元年８月に、このプロジェクトが実現した訳です。途中経過では、株式会社ということで、当初、国からの補助を得て建設する計画が補

助対象外となったり、農業倉庫としての指定がとれず、営業倉庫としての指定となったことなど、困難を克服しての実現でした。

私は、本所の一担当でしたので、上司である中橋米麦課長（現農産部長）・森山調査役（現麦類課　考査役）の指示に基づき、書類の作成・整備を手伝った程度でありますが、やはり思い入れはあり、平成元年のゴールデンウィークに家族とともに、建設中の施設を見にいったことがあります。

それまで、書類上で触れていたプロジェクトが目の前で、完成を目前にした姿まで仕上がっているのを見て、大きな感動を覚えた記憶があります。

以降、産地の麦貯蔵・船積み施設として、円滑な物流に寄与してきたことは勿論ですが、均質化麦（異なる蛋白等の原料をユーザーのニーズにあった数値に調整をして出荷）の試験的な取り組みにも貢献してきた施設でもあります。

運営にあたっては、農協サイロ株式会社の役職員の皆さんの努力は勿論のこと、関係者一体となった取り組みと実需の協力により、円滑な運営が行われていると聞いております。

また、昨年は、更なる面積の拡大と、新品種ホクシンへの切り替えによる反収の増加等により、1.5万トンの増設を行い、更に、体制を強化した経過にあり、十勝地区の麦のシンボルとしての色合いを、より強いものにしている経過にもあります。

12年産より、民間流通への移行に向けて、今後、この施設の持つ意味と役割が、より大きなものとなることが期待されるところです。

＜河本　直樹＞

十勝サイロ